

思考力と表現力を育てる

高野光男

(三省堂国語教科書編集委員)

小論文と言えば今や推薦入試やAO入試の定番である。「調査書を主な資料として判定する」際には「小論文を課すのが望ましい」という文部省(当時)通達にもよるが、従来型の試験より、思考力や表現力、専攻分野への関心や適性を総合的に評価できるということで各大学が積極的に導入した結果であろう

『国語表現Ⅱ』の今回の改訂で新設された「論理的な文章を書く」という学習活動は、この小論文の学習とほぼ同様の内容で構成されている。論理展開を支える要素「段落」「接続語」「指示語」の学

習に始まり、その発展として「文章提示型」「図表提示型」「テーマ提示型」の三課題が置かれている。だがもちろん、この改訂は大学受験対応として行われたわけではない。

では、そのねらいとは何か。ひと言で言えば、思考力と表現力を育てるためである。論述における論の展開とは思考の道筋そのものである。そして、この思考という見えない活動を可視化するのが、例えば接続語の存在だ。

具体的に見てみよう。「接続語」の「レスナー」で取りあげられた柏木博の文章はいくつかのキーになる接続語に注目すれば、次のように構造化できる。

一般的な事実 **しかし** それに対す
る筆者の見解(問題提起) **例えば**
つまり (結論) 筆者の見解を支える具体例(論拠)

実は、『しきり』の文化論』を通読すればすぐに気がつくことだが、この構造はこの本全体に通底するもので、それに気づけば内容の理解はぐんと容易になる。接続語は論旨を把握する重要な手がかりだというのはこのことだが、問題はこれを内容理解にとどめるのではなく、思考

法の問題としてとらえ、それをいかに学習者自身のものとしていくか、それがここでの学習活動の要なのである。

柏木は前提となる一般的な事実から出発し、それを受けとめ、それに対するアンチテーゼを提示するという方法をとっている。これは学問・研究の常道だが、ここから論理的な文章を書くという表現活動が実はコミュニケーションの問題とも関係していることが見えてくる。というのは、発展課題として取りあげられる文章の題材は、先端医療政策、フリーター・ニート、日本の人口構成、ボランティア活動といった、トレンドイイな話題であり、こうした問題に関心を持ち、社会と自分の接点をもつことも広義のコミュニケーションの一つであるからだ。問題はこうした外から与えられたテーマをいかに自分の問題として受けとめられるかであるが、ここに「身近なテーマを書く」、「対話」から文章へ、「取材から発表へ」、「体験から物語へ」、「自分」のことを伝える」といった本単元の学習の成果が生きてくるのである。

たかの みつお 東京都立産業技術高等専門学校教授。